

凡人の大宰相

今里廣記

昭和三十五年七月、池田さんが首相になってからは、大平さんはむやみと身边が多忙になってきた。

どちらかというと、池田さんは余り細かいことには不向きな方で、細かいことは大平さんとか宮沢さんとかに委されていたようで、それともう一人、後に長期信用銀行に行った、早逝した墨字の上手な稲田耕作さんがいた。それぞれに持ち分に応じて個性、特長を生かして使い分けていたはずだ。

池田さんは、一般から誤解される政治家の料亭通いは敬遠して、比較的問題のない、あたりの宿屋を中心にして、およそ議論中心に賑やかな交歓を行っていたが、そのなかでも常連として、賀屋興宣、松永安左工門、永野重雄、木川田一隆、桜田武の各氏あたりが座をとりまとめていたし、ほとんどの場合、大平さんが連中と伍して人なつこい顔に柔らかな目つきで対話にうなずきながら楽しんでいたのを、今でもはっきりと覚えている。

大平さんは人も知る稀代の勉強家で、読書好きである。新しい洋書が翻訳されると、逸早く車を止めて書店に寄り、目を通し買い求めて、ホテルオークラなどの会合の席で、徒然のまま読後感などをぼつぼつと話し出す。

もちろん経済の話もあつたらうけれど、文明論、未来観なども織り交せてあつたようだ。一再ならず感銘深かつたらしい新しい本を頂戴したこともある。真実その人だった。

ものごとの考え方が万事几帳面で、余り冗談こともいわない。よくあれで性格が正反対の池田さんの満幅の信頼感を得ておられたものだったと思う。

僕なんかも学問が足りない故か、語学は格別に苦手だが、大平さんはむしろ楽しんでた。およそ歴代の首相のなかで一番達人な人だったし、国際会議などもそれほど苦労はしなかったのではないだろうか。

ベネチアのサミットを目前にして倒れたのは、ご本人にとっても痛恨極まりないことだったろう。

八〇年代以降の日本の将来については識者ごもごも楽悲両様な意見が交錯しているが、大平さんの心中はさよ
うな時ほど、政治家の使命感というものを厳しく見つめておられたはずだ。

かわいがっていただいたものとして、ご哀悼にたえない。

(日本精工会長)